



愛する家族 絶筆の中に

河野裕子さん 死の前日に11首

息が足りないこの世の息が——歌人、河野裕子さんは命尽きるまで歌を詠みつづけた。すでに鉛筆を握る力はなかった。目をつぶったまま、かほそい声でつぶやく。夫の永田和宏さん(63)ら家族が書きとめた11首には、64年の生涯を生き抜いた生と死と、家族への思いが刻まれている。

(河合真美江)

心細くこの世の道は続きるむ階段おりきて
手をのべてあなたとあなたに触れたきに息が足ら

青磁社が刊行した牧水賞の歌人たちシリーズ『河野裕子』に、亡くなる前日の8月11日に口述した絶筆11首が載っている。

京都市内の自宅で在宅看護になり1カ月余り。その日、朝から苦しい、苦しいといひ、また、うつらうつらした。昼ごろ長男の永田淳さん(37)が枕元にいくと、いきなりしゃべり出した。五七五になっている。あわてて原稿用紙に書きとめた。



「コスモスが好きでした」と河野裕子さんの思い出を語る永田和宏さん(京都市左京区)

夫の和宏さん「最後まで歌人、いい妻、いい母」

心細くこの世の道は続きるむ階段おりきてありがたうといふ
 旦那は茶碗かちつかせ食ひおへぬ茗荷の花と鯛が二尾と
 河野さんにとって、白く透き通った花をつける茗荷は死と結びついていた。母が一昨年亡くなった時、へみんない子と眼を開き母はまた眠る茗荷の花のやうな臉閉ぢと詠んだ。絶筆にも茗荷が5首、登場する。

屋前に月の光がすうすうすう家族四人もひるんでしまふ
 すうすうと四人の誰もが寒くなり茗荷の花の透くを回せり
 長女の紅さん(35)も含め、歌人一家として知られる。最後まで4人一緒。愛する家族が歌のなかにいる。

ルビや漢字、かなの表記も本人が指示する。20分足らずで7首できた。「この日、話す言葉すべてが歌だった。死が遠くの形のない怖いものではなくなり、親和性さえ感じられる歌だ」と淳さん。

少し眠り、目覚めると、再びかすかにつぶやきだした。今度は和宏さんが書きつける。

あなたらの気持ちがあんなにわかるのに言ひ残すことの何ぞ少なき

